

# ルネと過剰の世紀

シャトーブリアンの初期小説における年齢の生理学

秋元 陽平

## 序. 青春と世紀病

フランソワ・ルネ・ド・シャトーブリアン (1768-1848) の『ルネ』 (1802) は、ある種の青春小説として読まれてきたといっても間違いにはならないだろう。しばしば引き合いに出される同時代人たち——たとえば十六歳で同書を読了し、まさしく自分のことが書いてある、と震撼したサント=ブーヴ<sup>1</sup>、あるいは一読して「ルネはわたしだ」と感じたジョルジュ・サンド<sup>2</sup>——の述懐はいずれも、後続世代の作家たちが焦がれた若年期の鏡像ルネ、というイメージを供給して已まない。隣国の大作家ゲーテの壘みに倣うかのごとく、シャトーブリアン自身が後年、いくらか演劇的な身振りをもって同書を「亡きものにしてしまえるものなら、そうしてしまうだろう」と出版を後悔してみせたエピソードもまた、この奇妙な短編小説に感傷的な若書き——もっとも、作家は出版時には既に三十代であるが——といった色彩を与えていることは否めない<sup>3</sup>。しかし、青年期あるいは思春期という人生の過渡期と『ルネ』が結び付けられる直接的理由はやはり、主人公がその「症例」となるべく運命づけられているところのメランコリーが、とくに「青年の病」として積極的に特徴づけられていることであろう。19世紀を代表する護教論であり、作家の出世作となった『キリスト教精髓』 (1802年) ——『ルネ』は初めはその一部として出版された——の中でも殊に著名となった「感情の茫漠」を扱う節において、シャトーブリアンがメランコリーの前段階としての同現象を以下のように定義していることはよく知られている。

---

<sup>1</sup> Charles-Augustin Sainte-Beuve, *Volupté*, J.P. Méline Librairie-Éditeur, Bruxelles, t. 1, 1834, p. 242.

<sup>2</sup> Georges Sand, *Histoire de ma vie*, nouvelle édition, Calmann Lévy, t. 3, 1876, p. 350-351, cité par Marie-Jeanne Durry dans *La Vieillesse de Chateaubriand 1830-1848*, Le Divin, t. 1, 1933, p. 485.

<sup>3</sup> François René de Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe*, Edition de Jean-Claude Berchet, Classiques Garnier, coll. « livre de poche », t. 2, 2012, p. 69.

これまで十分に考察されてこなかったように思われる、ある魂の状態について述べておく必要がある。それは、若く十全で活発な、しかし内に秘められたわたしたちの諸能力が、目的も対象も持たず、それ自体に対してのみ行使されたときの、情念の進展に先立つ状態である<sup>4</sup>。

「感情の茫漠」はしたがって、若い「わたしたち」の「諸能力」の成長と、それを活かすべき経験の不足のあいだのある種の不均衡のうちにその病根をもつ。しかし医学史に立ち返れば、病としてのメランコリーは必ず若年期に結びつくというものではなかった。その語源であり、原因と考えられてきた「黒胆汁」の増加としてのメランコリーはヒポクラテス以来の定義によればむしろ初老の病であり、医学者たちもしばしば熟年期のメランコリーの危険性に警鐘を鳴らしている。作家によるこの古典的な病理学的カテゴリの参照は、必ずしも若さの主題化を意味しないのである<sup>5</sup>。それにもかかわらず、シャトーブリアンの初期小説においてメランコリーと若年は必然的な結びつきをみせる<sup>6</sup>。主人公ルネもそのような「病識」を持っているのである。たとえば、ルネは同名小説の冒頭において、二人の「尊敬すべき」老人たち、すなわち宣教師スエルとインディアン人のシャクタスに促され、自らの魂の彷徨を以下のように語り始める。

ぼくは自分のはなしを始めるにあたって、恥じらいを覚えずにはられません。あなたがた尊敬すべきご老人の心の平静さ、そしてぼくをとりまく自然の静けさにひきかえ、動揺し、興奮した自分の魂を思うとぼくは顔が赤くなります。あなたがたはどんなにぼくのことを哀れんでくださっていることでしょう！ぼくの際限ない不安は、あなたがたにどんなにみじめに映ることでしょう！人生の悲しみを使い尽くしたあなたがたは、力も美德もなく、おのが内に苦しみを見出し、自ら自身のうちにつくりだす不幸を嘆くほかほとんど叶わぬこの

---

<sup>4</sup> Chateaubriand, *Essai sur les Révolutions, Génie du Christianisme*, texte établi, présenté et annoté par Maurice Regard, Gallimard, 1978, p. 714.

<sup>5</sup> 近代以前のメランコリーの歴史については、Jean Starobinski, *L'encre de la mélancolie*, Points, coll. « Points essais », 2015 を参照。

<sup>6</sup> 本論では『アタラ』『ルネ』、そして同時期に既に構想されていたと考えられる『ナチェズ』の第一部を「初期小説」の括りとした。なお、『ルネ』はそもそも『ナチェズ』の第一部に組み入れられるはずであったが、周知の通り『キリスト教精髓』の一部として出版され、『ナチェズ』の完成版は1826年の全集に含まれる形ではなく出版された。この三作品の出版を巡る複雑な経緯は、以下の注解に明快にまとめられている。Pierre Glaudes, « René : un récit exemplaire ? » in *Chateaubriand et le récit de fiction*, sous la direction de Fabienne Bercegol et Pierre Glaudes (dir.), Classiques Garniers, 2013, p. 170-181.

若者を、どうお考えになるでしょう？ ああ、彼を糾弾なさらないでください、彼はもう十分すぎるほど罰されたのです<sup>7</sup>！

ルネは明らかに、若者の不安、それもある種特権的な仕方で若者にのみかわる不安を主題に据えている。しかし、メランコリーはなぜ若年の病なのだろうか。若者は老人のように「人生の悲しみを使い尽くし」ておらず、己のうちに漲る情念に苦しめられているからなのだろうか？ そもそもここには、どのような情念の生理学が前提されているのだろうか？

探求を始める前に明らかにしておくならば、本稿はルネのメランコリーを、生命を成長させ、やがて老い衰えさせる年齢の力として読解する<sup>8</sup>。後述のとおり、医師たちが総合的な人間の学としておのれの領野を再編成せんとする野望を抱き始めた帝政期フランスにおいて、生命の時間的形態としての加齢はある種の文明論的関心の的となりはじめていた。それはこの時代の医学が、作家の同時代における最も著名な医学者の一人ジョルジュ・カバニス（1757-1808）においてそうであるように、生命をその生成と発展において解明しようと試みる「生理学」に代表されたことにもかかわっている。そのような時代にあって若者の病を主題化する『ルネ』は——著者のよく知られた科学者不信にも拘らず——実のところ、その描写のうちにこれらの知的言説と多くの論点を共有している。しかし同時に青年ルネは、医学をはじめとする知的言説が提出する新しい時代の道徳を受け入れることを明らかに拒んでいる。このように、シャトーブリアンの初期作品を、人間的時間の同時代的変容に対するひとつの違和感の表明として読むこと、これが本稿の野心である。

## 1. 若者と老人の対話

シャトーブリアンの初期小説において、若者はつねにシャクタス、スエル、オブリといった老人の存在によって反照されている。前掲のルネの独白におけるように、登場人物たちの年齢は奇妙に分極し、物語は老人と若者の対話

---

<sup>7</sup> Chateaubriand, *René, Œuvres romanesques et voyages*, texte établi, présenté et annoté par Maurice Regard, t. I, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1969, p. 118-119.

<sup>8</sup> シャトーブリアンの同時代から後続世代に至るまでの医師たちによる『ルネ』読解については、例えば以下を参照。Juan Rigoli, « Psychopathologie et poétique de l'« ennui » en France au XIX<sup>e</sup> siècle », *Criminocorpus* [En ligne], La pathologie du suicide, Communications, mis en ligne le 14 mai 2018, consulté le 26 juin 2019. URL : <http://journals.openedition.org/criminocorpus/3777>.

に満ちている。確かに、若者の不安を慰撫しときに叱責する、いわば「若さ」の補完者としての老人の存在はそれ自体、文学史に鑑みても珍しいものではない。近代であれば『ポールとヴィルジニー』に登場する老人、古代に遡るならば作家が『アタラ』の序文に引用した『イーリアス』における頼もしい老賢者ネストールのように、先例は枚挙に暇がない。物語上の役割が老人の存在を要請するとも考えられる——例えばジャン＝クロード・ベルシエは、シャトブリアンが『ルネ』のスエル神父を造形するにあたって、モデルとなった若きカナダ人神父をあえて老人として描いたのは説教に説得力をもたせるためだろうと注記しているほか<sup>9</sup>、物語の最終局面でメランコリーを断罪する役割を担うこのスエルの説教を「とってつけたような教訓」だと揶揄するサント＝ブーヴのような読者の反応を汲みつつ、この説教が、作家の自己検閲的な「超自我 sur-moi」の機能を果たしていることを指摘する<sup>10</sup>。スエルのうちに前述のような類型としての「老人」を見出すこうした試みは、いわば常識的な説得力をもっている。

しかし、シャトブリアンが執拗に反復する若者と老人の対話は、こうした類型に必ずしも留まるものではない。作家は絶えず若者と老人のあいだの、或いは人物類型と個別的情念のあいだの分極を不安定化し、微細な緊張をほのめかす。そもそも、前掲のルネの告白において「自然の静けさ」にも比された老年の心の平穏は、あくまで自らの悲劇に酔ったルネが舞台装置として欲したものではないか。ルネが老人というものは「人生の悲しみを使い尽くした」はずだと言うとき、この紋切り型は疑わしい。たとえば、当のルネの独白ののち、シャクタスはこの若者のメランコリーにいわば「感染」し、ただちに心を揺さぶられて叫ぶ。

「わが子よ」とシャクタスは息子ルネに言う、「オブリ神父がここにいればとわしは思うよ。彼は嵐のような激情を鎮めながらも、激情と無縁とは全く言えんような、なんともいえぬ穏やかさを心の底から引き出していたものよ。いわばあの人は嵐の夜にかかる月じゃ。浮かぶ雲たちも、その道すがら月を流し去ることはできん。純粹不変の月は、雲たちの上を静かに進みゆくのみじゃ。ああ、わしときたら、あらゆることに動揺し、突き動かされおる<sup>11</sup>！」

---

<sup>9</sup> Chateaubriand, *Atala: suivi de René*, présentée et annotée par Jean-Claude Berchet, Librairie générale française, Paris, coll. « Les Classiques de Poche », 2008, p. 155. note 2.

<sup>10</sup> *Ibid.*, p. 197-198, note 1.

<sup>11</sup> Chateaubriand, *René, Œuvres romanesques et voyages, op. cit.*, p. 144.

シャクタスがオブリに言及しつつこのように嘆くとき、彼は自身が理想の老人に値しないことを認めながら、シャクタスの青年期を舞台とする『アタラ』に、すなわち作品外の過去においてこの理想を体現する人物がいたことを示唆している。だが、「オブリ神父がここにいれば」という嘆きが、峻厳なるキリスト者こそがアタラクシアに相応しいということをもし含意するのならば、『ルネ』を締めくくる辛辣な説教者の役割をともし兼ねているように思われるスエルの存在、嘆く彼のすぐ隣でルネの話を聞くスエルの存在を、シャクタスは意に介してもいないことになりはしないか。さらに、シャクタスの描くオブリ像にしても、超越的な静けさの体現としての月に喩えられつつも、その背景には「嵐」が指定されている。加えて、『アタラ』においてシャクタスはオブリを老賢者として称える一方で、若き情念の生々しい残存としての傷跡を介してその過去を強調する。

彼は、生まれつき情念のない人間の、死んだように青ざめた顔をしとったわけではなかったよ。彼の来し方が懊悩に満ちたものじゃったこと、額の皺が、神とひとびとへの愛、そして美德によって癒やされた情念の美しい傷跡じゃということがみてとれたわい<sup>12</sup>。

このような若かりし過去の強調は、一方で説教を聴く若者たちの共感をさそい、対話の通路を開くための小説的方法であると差し当たり言えるかもしれない。ところが別のヴァリエントは、この「傷跡」に加えて、オブリ神父の長いひげが、未だに「墓をのぞむかのように、自然と地へと伸びて」いるという記述を含んでいる<sup>13</sup>。死を熱烈に称揚する彼の説教にも頭在化するこのキリスト者の激しい厭世は、ルネのメランコリーと今や全く無縁であると言えるだろうか。

彼ら老人たちはしばしば若者たちの導き手であると同時に、「若者の病」の過去を極めて鮮明に——その激しさを未だ抑圧しているかのように——記憶する者として振る舞う。ここでシャトーブリアン自身が「情念の茫漠」の定義において、メランコリーを若年と明確に結びつける一方で（「若く十全で活発な、しかし内に秘められたわたしたちの諸能力が […]」）、後続部分では「文明」の影響であると見做していることを思い出されたい。

---

<sup>12</sup> *Ibid.*, p. 65.

<sup>13</sup> *Ibid.*, p. 1178.

人々が文明化すればするほど、この情念の茫漠の状態は充進する。なぜならばこのとき、たいへん嘆かわしいある事態が生じるからである。つまり、目の前の大量の模範例が、人間や感情を扱う無数の本が、人々を経験なしに巧みにする。享受するまえから幻滅してしまうのだ<sup>14</sup>。

メランコリーという使い古された医学的カテゴリーの『キリスト教精髓』におけるこうした再定義は、原因と結果の関係をいくらか混乱させる。メランコリーは若さという個人の時間にその原因を見いだされる一方で、文明の進展という集合的時間とも関連付けられるからだ。メランコリーが文明を生きることへの幻滅によって引き起こされるならば、情念に悩まされるのは若者だけではないはずだ。「文明」の病をそのまま「若さ」の病に転換してしまうこの論理は、いかにして両者を共犯関係におくのだろうか。

## 2. 永遠の若年

ルネの「若さ」を問い尋ねる前に、ことがらを反対の側面から眺めておこう。1791年アメリカ旅行の際に既に「原始社会においては年齢は権力の源泉であった」と書き留めたように、シャトーブリアンは『ナチェズ』において未開社会における老いの力を強調する<sup>15</sup>。同書の第一部においては、部族を取り仕切る大長老「太陽 le Soleil」は齢百歳に達し、老人のみで構成された軍隊の描写においては、老人の外観的特徴と戦士の崇高な武勇がほとんどゴロテスクといってもよい効果のうちで結び合っている。

武装した老人たちを目の当たりにして、深い称赞の念がひとの心を捉えた。森の暗がりのなか、禿頭や白髪頭が、楡の木々が覆う空の下、まるで川の銀色の波のように蠢いているのが見えた<sup>16</sup>。

『ナチェズ』の部族社会においては、老人はしばしば若者よりも遥かに力強く、若々しい。それどころか、文明の側に属する若者のセンチメンタリズムは、しばしば若者特有の欠点として断罪される。たとえばイリノイ族に捕縛され火炙りにされる運命が定まった大長老は、「わたしは若いから耐えられますが、あなたは！」と同情を示すルネを一喝した上、斧で身体を切り刻

---

<sup>14</sup> Chateaubriand, *Essai sur les Révolutions, Génie du Christianisme, op. cit.* p. 714.

<sup>15</sup> Chateaubriand, *Les Natchez, Œuvres romanesques et voyages, op. cit.* p. 751.

<sup>16</sup> *Ibid.*, p. 313.

まれるそのただ中、一層力強い声で「お前に死ぬ勇気をつけてやるため、男一匹が魂のありったけの力を使ってやろうと思ったときになにができるかを教えてやるためだけに、わしはこの戦いに打って出たんじゃ！」と叫ぶ。「まる一世紀を生きた」この老人がこときれるとき、それはスエルに「魂の力を使う」ことができないという理由で叱責されるルネの懦弱なメランコリーに対する痛罵となる<sup>17</sup>。また、フランス植民軍とナチェズ族の抗争の場面において、シャクタスの友人である老人アダーリオは、一族に伝わる「魔法の泉の水」を浴びて若返ってフランス人青年たちを皆殺しにするが、この唐突な若返りはしかし、老いの否定というよりは、むしろ老人が必要に応じて若者の特権である力をいつでも引き出せるという事態、その上もはや欠点としての柔弱さを持たないという点において若者の優位に立つという事態を示している。というのも、アダーリオは泉の力で「青春の血が彼の血管に戻ってきた<sup>18</sup>」ことを感じるが、それが意味するのはもちろん優美な若年の回帰ではなく、メランコリーと共感の、それもほとんどサディスティックとってよいほどの、徹底的否定なのである。

フランス軍には、シルヴェストルという名前の若者がいて、彼は希望なき愛の悲しみから、栄光あるいは死を求めてかなたの国へやってきた。頑固な金持ちのアランヴィルは、この息子と貧しいイザベルとの婚姻を認めなかったのだ。アダーリオはシルヴェストルが、地を這う葡萄の蔓にとられ足を抜こうとしてるところを捉えた。長老は棍棒を振り上げると、このアランヴィルの後継者の頭に一撃お見舞いする。頭は頑固な雌ラバの足の下のひょうたんのように砕ける。不幸な男の脳漿は地に撒き散らされて湯気を立てる […] 彼は続いてシャルルの息子、アデマールを痛めつける。ドルドーニュの岸の住人アデマールは、彼を唯一の頼みとする老父に、あらゆる種類の愛情とともに育てられ、軍務に与えられるりっぱな俸給でこの父を養っていた。しかしシャルルは、遠い国から帰郷した息子をその胸に抱くことは決してなかった。長老の斧がアデマールの顔を捉え、額の一部、鼻、唇を削り取った。おぞましい物体と成り果てた兵士は、恐怖する仲間たちのただなかにしばらく立ち尽くした<sup>19</sup>。

登場するやいなや虐殺されるこれら二人の「文明社会」の「若者」のエピソードにはそれぞれ、従軍の背景として、貧しい者に対する優美な愛を印象づける極めて短い伝記的補足がなされているが、とりわけシルヴェストルは、

---

<sup>17</sup> *Ibid.*, p. 343.

<sup>18</sup> *Ibid.*, p. 320-322.

<sup>19</sup> *Loc. cit.*

叶わぬ愛の苦しみから半ば「死」を求めて「新大陸」へ赴いたという点でいくらかルネを彷彿とさせる。彼らを徹底的に殺戮するアダーリオの暴力は、作中でも際立った凄惨さゆえに、篤実なインディアンと墮落したフランス人の抗争という叙事詩上の基本構図を、前者の残酷な老人による後者の心優しい若者の虐殺という別の対立軸に置き換え、読者の共感対象を一時的に混乱させかねないものですらある。「しかしまあこの老いぼれを許してくれるじやろうて、あんたに墓を約束してやる…ハゲワシどものただ中にな<sup>20</sup>」とアデマールに向かって叫ぶ老インディアン、アダーリオは、文明人の若者の無力に対して、「老いぼれ」の野生人の強靭さをアイロニカルに突きつける。

こうした老人たちの武勇が強調されるからといって、部族社会において若さそのものの価値が切り下げられているというわけではない。それどころか、シャクタスの瑞々しい若さは、物語上で何度も重要な役割を果たしている。アタラが自分よりも年上のシャクタスについて、「わたしはあなたを、若く美しい囚人を見たのです<sup>21</sup>」と回顧する彼の捕縛のエピソードにおいても、対立部族の女たちは彼が「若者である」という理由で可愛がり、「優しい哀れみと親切な好奇心」を示す<sup>22</sup>。さらに、敵対する兵士は「若さを理由に」シャクタスをあえて「軽く」捕縛したことが契機となって、彼は鉄鎖から逃れることに成功するのだから<sup>23</sup>。そもそも、シャクタスのスペイン人養父となるロペスが、シャクタスの「若さと単純さ」に感銘をうけたことが物語のすべての始まりを作り出していることもまた忘れるべきではない<sup>24</sup>。野生人の若者の澁刺とした若さはいわば、物語上の出来事同士の蝶番の役割を果たしている。それならば、未開社会における老人はあくまで「若き年長者」に他ならず、ナチェズ族においてしばしば称賛されているのはむしろ、「老衰の不在」、そしてそれと対になる「病としての思春期の不在」としての「若い単純さ」ではないか。それゆえ作家は、ナチェズ族の老いた戦士たちからは「歳すらも陽気な単純さを奪うことができない<sup>25</sup>」と強調したのである。文明においてのみ精神は成熟するというのはそれ自体ひとつのクリシェであるが<sup>26</sup>、シャトーブリアンはこの成熟をひとつの病として描き、文明人ルネ

---

<sup>20</sup> *Idem.*

<sup>21</sup> *Ibid.*, p. 76.

<sup>22</sup> *Idem.*

<sup>23</sup> *Ibid.*, p. 40.

<sup>24</sup> *Ibid.*, p. 39.

<sup>25</sup> *Ibid.*, p. 40.

<sup>26</sup> 例えば「パンクック医学辞典」の縮約版における「若年期 *Jeunesse*」という無署名



とそのエピソードたちの柔弱さと、インディアンの老人の、年齢でもなお失われぬ武勇を対比することを選ぶのである<sup>27</sup>。

### 3. 水流の形象

他方で、シャトーブリアンによる「情念の茫漠」の定義を信じるならば、文明人の本質的な不幸は、与えられた情報に対する経験の不足であり、行使しきれない「過剰」な力——それはとくに情念としてあらわれる——を抱いて生きざるを得ないということであった。シャクタスは物語の結末を飾る寓話のなかで、ルネの情念を氾濫する大河になぞらえている。

ある日、メシヤスベ河は、まだ水源にだいぶ近いころ、じぶんが清らかな小川に過ぎないことに飽きてしまったのじゃ。彼は山々に雪を、激流に水を、嵐に雨滴をくれと頼み込んで、岸を越え、愛らしい川沿いの一辺を荒らしてしまう。傲慢な水流は、はじめおのれの力を自賛するのじゃ。しかし、孤独のうちに見放され、その水はつねに濁ったまま、じぶんが流れ通ったところすべてが荒れはておったのをみた河のやつは、自然が、鳥たちが、花々が、木々や小川たち——かつてこやつつと平和な流れの慎ましい連れあいじゃったものたちが掘ってやった、ささやかな川床を惜しんだのじゃ<sup>28</sup>。

シャクタスの寓話においては、情念は「連れ合い」の優しさを忘れた傲慢と孤独のなかで膨張し、そのことによって自滅する。この過剰の表象は、後述のとおり、孤独は情念を「行使するべきあらゆる対象を取り除いてしまう」と主張するスエルの説教とも整合的である。しかしこうした見解は、同時代にあって一般的なものと呼べるだろうか？ たとえば孤独をめぐる精神衛生の手引書として 18 世紀以降きわめて広く読まれたスイス人医師ツィンマーマンによる『精神と身体における孤独の検討』は、自己観察の契機として孤独を価値付け、そこにメランコリーに抗する治療学的価値を見出した。ツィンマーマンは以下のように主張する。

---

項目は、知識と経験の両方が不足している若年期は「情念、信頼、期待、性急な判断」の齢であるとした上で、一部の文明化された人民を除いては「知性はまったくの不活状態にとどまるため」、成熟は肉体のみに関与すると断定している。Cf. « Jeunesse » in *Dictionnaire des sciences médicales abrégé, par une société de médecins et de chirurgiens*, Panckoucke, 1824, p. 286. バンクック辞典については、後注 32 を参照。

<sup>27</sup> シャトーブリアンにおける「野生人」概念の包括的な検討については、以下の文献の第 III 章を参照。片岡大右『隠遁者、野生人、蛮人』知泉書館、2012 年。

<sup>28</sup> Chateaubriand, René, *Œuvres romanesques et voyages, op. cit.* p. 145.

しばしば人は、自分自身と向き合うよりも先に異なることをやりつくしてしまう傾向にある。こうして、わたしたちは自分たちの国にある興味深いものに気づくよりさきに、遠くの国々を訪れることから始めるのだ。慎重な若者と経験ある老人はこのようにはならない。彼らにとって叡智のはじまりとおわりは、孤独と、自分自身についての真剣な観察のうちにあるのだ<sup>29</sup>。

当て所なく放浪するルネを先んじて揶揄するかのようなこの啓蒙の世紀を代表する孤独論は、しかしよく検討するならば『ルネ』とは異なるエネルギー論的前提に立つ。ツィンマーマンによれば、「慎重な若者」と「経験ある老人」は孤独に向き、無駄に旅行をしたり、外界に反応したりする必要を感じない。こうして、彼らは自らの貴重な力を浪費せず自己省察に励むのであり、社会への無用な容喙はしばしば持って生まれた限りある力の浪費となりかねない。スエル神父の処方箋はむしろエネルギーの過剰を危険視し、ナルシスティックな自己への引きこもりに異を唱え、あふれる情念をいわば「放流」することを推奨する。

神とともに生きるのであれば孤独は害ですよ。孤独は魂の力を倍化し、同時に働きかけるべき相手をすべて取り除いてしまうのです。だれでも力を受け取ったものは、同胞のためにそれを使わなくてはいけません。もし力を持ち腐れのままにしたら、まずひとしれぬ惨めさによって罰され、遅かれ早かれ天から恐ろしい刑を受けることになりますからね<sup>30</sup>。

ここには、生命エネルギーをめぐる前提の差異が観察される。ルネにおいては貴重な「自身の力」を保存することは問題ではなく、氾濫を防ぐために放流することが問題なのである。ルネはその草稿として残された断章のひとつでは、スエルの診断の正しさを証明するかのごとく、自らのうちなる「生の過剰」を疑いの余地なく明快に訴えている。

現世のさなかにほとんどたった一人、生の過剰とともにあって、ひとは自身のうちに宇宙を喰らい尽くしなお満腹にならない食欲な力を感じるのです<sup>31</sup>。

河は氾濫と過剰を引き起こす。メシヤスベ河のメタファー的寓話はしたがって、孤独のうちで増大する生という問題を提起している。このエネルギー

---

<sup>29</sup> Johann Georg Ritter Von Zimmermann, *La Solitude*, la nouvelle traduction par X. Marmier, Charpentier, 1859, p. 282.

<sup>30</sup> Chateaubriand, René, *Œuvres romanesques et voyages*, op. cit., p. 145.

<sup>31</sup> *Ibid.*, p. 1213.

の排出の必要性の理論、いわば放流の理論はじつのところ、19世紀初頭の医学が好んで論じた主題のひとつであった。もちろん、我慢せずに発散せよ、という、性的欲望とあふれ出す水のアナロジー自体には特別に目新しいところはない。しかししばしば生理学者たちは水流のモデルに、つまりこの生命力の根本的な「過剰性」に特別な意味を見出す。例えば、この時代に最も普及した医学分野のレフェランスであるパンクック医学辞典は、カバニスを筆頭に広義の生氣論に傾斜した生理学者たちが「デカルト的心身二元論」——少なくとも彼らは、精神が身体に及ぼす影響を無視、ないし単純化する慣習をしばしばこの哲学者に帰した——に対して築いた堡壘であり、性科学と人間の発達にまつわる記事を取りわけ多く掲載していることで知られているが、青年医学の専門家として名を馳せたポリニエールによる「思春期」の項は、人間の成長における情念の影響という、心身相関の代表的トピックを扱ったものである<sup>32</sup>。彼は、青年の精神衛生をめぐる助言のうちに、水流の形象を特徴的な仕方でも導入する。

堤防があってもせき止めるどころかますます刺激してしまうだろうから、激流は自由に流しておやりなさい。ただし、おそるべき水の塊を、いくつもの小川に分けてやりなさい、そうしたら破壊のただ中から豊穡が生まれるでしょう。

[...] 思春期の青年の情念を支配するには、強い関心を引き起こして、青年の性向と意欲がそのうちで分かちもたれるようなさまざまな実践によって分割しましょう。つまり、分割シテ統治セヨ<sup>33</sup>。

この水流モデルはまず、対象に先立って消費しなければならないエネルギーが過剰に存在することを含意する。そして実のところ、こうした目標の決定に対する欲望の先行を、ルネがアメリの手紙をうけとった顛末を語る際の奇妙な表現のなかに見出すことができる。

---

<sup>32</sup> パンクック辞典の全般的特質と歴史的な位置づけについては、以下の論文を参照。  
Clyde Plumauzille, *Élaborer un savoir sur la sexualité : le Dictionnaire des sciences médicales (1812-1822)*, in *Clio. Femmes, Genre, Histoire* [En ligne], 31 | 2010, mis en ligne le 23 août 2013, consulté le 10 avril 2020. URL : <http://journals.openedition.org/clio/9611> ; DOI : <https://doi.org/10.4000/clio.9611>

<sup>33</sup> Isidore Polinière, « Puberté » in *Dictionnaire des sciences médicales, par une société de médecins et de chirurgiens*, Panckoucke, t. 46, 1820, p. 63.

ああ、親愛なるお二人よ！ ぼくは想像上のものでない不幸のために涙を流すということをついに知ったのです。ながらく行き先を失っていたぼくの情念は、このはじめての獲物にはげしく飛びかかったのです<sup>34</sup>。

情念は対象によって掻き立てられるのではなく、堤防が決壊した部分から偶発的に横溢する。『ルネ』はしばしば近親相姦的な愛の断念の物語として要約されるにもかかわらず、ルネの懊悩がこうした具体的な原因に先立つ情念によることを強調する記述には事欠かないのである。『キリスト教精髓』の同年、1802年にはじめて出版された『人間心身相関論』の第4章（以下「年齢論」）において年齢の生理学というジャンルの創始者となった、イデオログにして医師のジョルジュ・カバニス<sup>35</sup>によれば、若い男性はしばしば「現実の対象」に満足せず、外的対象に喚起されるのではなく「恋人を愛する必要性」を端的に内的欲求として感じ、「見えない力」を愛するようにして性成熟を迎える<sup>36</sup>。こうした記述は、ルネの以下のような独白を的確に医学的言説へと翻訳したものであると言える。

ああ神よ！ もしあなたがぼくの欲望どおりの女性を与えてくれたら！ もし、われらが父祖アダムのように、ぼく自身から引き出されたひとりのイヴの手をとって連れてきてくれたなら<sup>37</sup>。

のちの『失われた時を求めて<sup>38</sup>』の語り手を彷彿とさせる、自らの骨から生まれた女への愛というモチーフに潜む自慰的な循環のファンタスムは、欲求が外的対象に先んじて自らの内なる過剰となって現れることの帰結である。まだ存在しないものを欲望するとき、性欲とはそれ自体ひとつの内的過剰なのだ<sup>39</sup>。

---

<sup>34</sup> Chateaubriand, *René, Œuvres romanesques et voyages, op. cit.*, p. 140.

<sup>35</sup> 年齢の科学の基礎樹立におけるカバニスの貢献については、以下を参照。Rose Goetz, « Les âges de la vie dans les *Rapports du physique et du moral de l'homme* de Pierre-Jean-Georges Cabanis », *Le Portique* [En ligne], 21 | 2008, mis en ligne le 05 juin 2010, consulté le 03 juillet 2018.

<sup>36</sup> Georges Cabanis, *Rapports du physique et du moral de l'homme*, Chez Crapart, Caille et Ravier, Paris, 1806, p. 284.

<sup>37</sup> Chateaubriand, *René, Œuvres romanesques et voyages, op. cit.*, p. 130.

<sup>38</sup> Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, Gallimard, 1989 [1987], t. 1, p. 4.

<sup>39</sup> ロラン・カンタグレルは、精神より早い肉体の成長という意味でカバニスを用いる「思春期の性的メランコリー」概念のルネへの影響を簡潔に示唆する。これはまだ知らない対象への欲望というメランコリーの特徴をよく説明するが、本稿は後述のとおり、同時に反対の事象——つまり精神の過成長（早老）も重要視する。Cf.

なお、箴言「分割シテ統治セヨ *divide et impera*」のラテン語句を情念に関して転用することはポリニエールの独創ではない。気散じで情念を発散しようというのはまったく常識的な考え方である。たとえばサン＝ピエール神父が、政治と愛のアナロジーを扱う箴言のなかで既にこの句を用いている。

愛を弱め、つねにこの喜び、この趣味を理性の範囲内に保つためには、複数人に愛を向けることが望ましいかもしれません。 […] こうして、分割シテ統治セヨという、政治においてかくも真実なる箴言は、愛においても、理性に向けたものとしては真実であるかもしれないのです<sup>40</sup>。

しかし、コンテクストの違いは明白である。サンピエール神父の微笑ましい提案においては、情念を「理性の範囲内」に保ち制御可能になるまで小さくすることが問題となっているのに対して、ポリニエールの描く欲望の激流のモデルが目指すところはこうした細分化ではない。まずポリニエールにおいて、情念の水流という形象は放流と結びつくのみならず、堤防によってかえって「刺激」される「水流」という奇妙なイメージを与える。欲望の肯定と再評価は前世紀の感覚主義的議論の自然な帰結であるが、欲望が液体と神経の複合的な性質を獲得していることは注目に値する。堤防はいわば、思春期の情念を単に抑え込むものではなく、しばしばそれを昂進させかねないものでもあるということだ。ところで、シャトーブリアンは『キリスト教精髄』の執筆意図を説明したフォンターヌへの手紙において、キリスト教が文学にもたらす効果についてこのように要約している。

もしその本質が、人間の情念に障壁を設けることにあるような宗教が存在するとしたら、その宗教は必然的に演劇において、そして叙事詩において情念の作用を高めるはず<sup>41</sup>。

この記述は、『キリスト教精髄』にもほぼそのまま見出せるが、「障壁」の語が、「馬銜」に置き換えられている。

---

Laurent Cantagrel, *De la maladie à l'écriture : genèse de la mélancolie romantique*, Tübingen, M. Niemeyer, 2004, p. 151 et sq.

<sup>40</sup> Abbé de Saint-Pierre, *Ouvrages de morale et de politique*, chez Jean-Daniel Beman, t. 13, 1737, p. 308-309.

<sup>41</sup> Chateaubriand, *Lettre à M. Fontanes, Œuvres romanesques et voyages*, op. cit. p. 1266.

もしも人間の情念に絶えず馬銜をつける役割を果たす宗教が存在するとすれば、この宗教は必然的に演劇において、そして叙事詩において情念の作用を高めるはずだ<sup>42</sup>。

情念に立ちただかり華々しく打ち砕く障壁は、『精髓』においては人間を長い目で——「絶えず」の語も追加されている——後ろから見張り、制御する「馬銜」に置き換えられている。また、他のヴァリエーションに存在する、「情念の怒濤がキリスト教によってときに刺激され、ときに鎮められ […]」<sup>43</sup> という記述も最終版では削除されている。護教論に相応しからぬ扇情的——あるいは同時代の語彙としてはあまりに「生理学的」——な表現を排したこれらの変更にもかかわらず、馬銜につけた手綱によるブレーキ効果が、逆説的ではなく、「必然的に」情念の効果を高めるのであることを自明のものとしているかぎりにおいて、シャトーブリアンの情動的節制の様式はポリニエールのモデルと共通の機序をもつ。したがって「情念の茫漠」は、理性と反省による感受性の抑圧としてのみ理解されてはならない。もちろん、例えばゲーテの描くウェルテルならば、若き奔流を押しつぶさんとする市民社会の、文明の堤防にぶつかることをこそ最大の困難とみなすだろう。

ああ友人諸君、なぜ天才の激流が氾濫を起こすということがこうも少ないのでしょうか？ なぜこの激流が波を逆立て、驚嘆したあなたがたの魂を転覆させてしまうことがこんなにも少ないのでしょうか？ 親愛なる諸君、それはね、この二つの岸の向こうにはまじめで思慮深い人々が住んでいて、小さい家や小さい木立、チューリップの花壇やら菜園が飲み込まれてしまうかもしれないので、激流をせきとめる堤防をつくって水を流してやれば、それらを脅かす危険をまぬかれることができるというわけなんですよ<sup>44</sup>。

ウェルテルは自然に湧き上がる創造的な奔流や愛を、市民社会の掟と折り合わせるができない。ところが、ルネの告白は社会から隔離された場所での自己肥大をこそ問題としているし、『精髓』におけるキリスト教の定義やポリニエールの理論は堤防のもつ逆説的効果に着目しているのである<sup>45</sup>。

---

<sup>42</sup> *Ibid.*, p. 686.

<sup>43</sup> Chateaubriand, *Essai sur les révolutions, Génie du Christianisme*, op. cit. p. 1770.

<sup>44</sup> J-W.von Goethe, *Les souffrances du jeune Werther*, traduit de l'allemand par Bernard Grœthuisen, Gallimard, coll. « Folio bilingue », 1990, p. 63.

<sup>45</sup> 片岡大右は前掲書第2章 p. 92-97.において、『キリスト教精髓』における古典主義詩学の影響に着目し、シャトーブリアンがキリスト教の「傷口と鎮静剤」としての二重性を称揚していることを指摘している。

対象の不在や抑圧が内部の過剰性を呼び、過剰性が対象を生み出すということは、同時代の生理学、とりわけ思春期の成長理論の主張でもある。カバニスは「年齢論」において、「見えないもの」への欲求としての性欲が血液循環を早め、血液循環の加速が性欲を高めるといった内的過剰がもたらす循環の存在を論じているが、彼はこの観察をただちに一般化し、「生命は円である」、そして「円においては、円周上のあらゆる点は終わりでありはじまりである」というヒポクラテスの言葉を引用する。原因と結果の連関によって生命が自己成長することを、彼が呼ぶところの「ヒポクラテスの循環」によって示そうとするカバニスは、「完成可能性」を奉ずる自らの進歩主義的イデオロギーを、こうして過剰性と循環という形で生理学的次元に導入するのである<sup>46</sup>。

#### 4. 時間と過剰

こうした過剰性は、しかし常に健全な成長を保証するものではない。成長に向かうはずの過剰なエネルギーが、放流されずにせき止められ続けられたとき、ルネは時間の空転を体験する。

はじめぼくを魅了したこの生活は、まもなく耐えられないものとなりました。  
[…] けれどぼくには急に、森が甘美に思えたのです。こうしてぼくは突如として、まだ始まってまもないにもかかわらず何世紀も徒に過ごしたかのごとき遍歴に終止符をうち、田舎へ隠遁しようとして突然決めたのです。わたしは自分の意図するところすべてに情熱を注ぎ込んでこの計画をあたためました。そして荒屋に我が身を埋めるために大急ぎで出発したのです<sup>47</sup>。

「まもなく」「急に」「突如として」「突然」「大急ぎで」という、憂鬱からの隠遁の決心にふさわしからぬパラグラフ内での一連の語彙の重複は、絶えず増大するエネルギーの間欠的暴発のあらわれであり、その象徴は本人が「ときどきぼくは突然顔を赤くしたのです、そして自分の心のなかで、激しく溶岩の河が流れているのを感じました<sup>48</sup>」と言うとおり、マグマをうちに秘めたエトナ山である。ここで興味深いのは、このルネの爆発的な素早さは、世界の時間の進みの遅さと驚くべき対比を成し、ほとんど何もしていな

---

<sup>46</sup> Cabanis, *op. cit.*, p. 284.

<sup>47</sup> Chateaubriand, *René, Œuvres romanesques et voyages, op. cit.*, p. 128.

<sup>48</sup> *Idem.*

いの「何世紀も徒に過ぎし」たかのような内的時間の加速となって彼を苛むことだ。この時間と過剰の関係性を、ルネは情景に仮託して描き出す。

都市の蒸気を朱に燃え上がらせる夕日は、幾世紀をもはかる時計の振り子のよりに、金色の流れのなかをゆっくりと揺れているようでした<sup>49</sup>。

この「諸世紀の時計」の振り子の比喻は、夕日が往還するという奇怪なイメージによって読者を戸惑わせるものである。沈むはずの巨大な天体が戻ってくるという奇妙な往復運動は、時間的進展なきまま幾世紀をいたずらに数えるルネの人間の時間に対応している。ルネにおいてはもはや、思春期に達したときに、その生命力の過剰によって心身にさまざまな病がもたらされるのではなく、生命力の過剰そのものが加齢を進行させるというひとつの逆転が観察されるのだ。サント＝ブーヴもまた、『ルネ』を以下のように評している。

ルネはソロモンが終えたところから始める。[...] 彼の分析はそれらを事前に分解してしまい、早熟な思考はそれらを色褪せさせてしまう。感じる前にあまりにも早く知ること——ある人々、社会があまりにも成熟した時代に生を享けたある世代のほとんどすべての人々の不幸はここにある<sup>50</sup>。

先走る思考によって力の行使先を失う早熟なルネは、老賢者ソロモンよりなお老いているが、これはある世代全体の経験であると批評家は喝破する。成熟した文明は早老をひとに強いる。過剰な生命力あるいは精神のエネルギーは、時間の経過を早めるのである。この生氣、加齢、文明の奇妙な関係が、『ルネ』の出版とほとんど同時期に生理学的研究の対象として、生命エネルギーとしての情念が身体にもたらす影響に着目する生氣論のスキームで論じられた例を示そう。生理学は、血液循環や器官の閉塞、老衰といった機械論的な老いの説明に不満足を覚えるがゆえに半ば必然的に、精神によって加速される肉体の老い、つまり早老と早熟に着目する。すでに引用した医師ポリニエールによるパンクック医学辞典の項目「思春期」は、百科全書の同項目でジョクールが引き写したデュフォンによる諸器官の発達をめぐる記述を参照、反復しつつも、独自の関心として、絶対年齢に対してある種の「ずれ」

---

<sup>49</sup> *Ibid.*, p. 127.

<sup>50</sup> Charles-Augustin Sainte-Beuve, *Chateaubriand et son groupe littéraire sous l'empire*, Garnier frères, 1872, p. 344-345.



として現れる早老や早熟の事例に着目する。幼女の妊娠や早発月経をめぐる珍例をたてつづけに蒐集し、羅列したのち、彼の関心は「思考器官の過度の行使」、つまり、「頭が良すぎちゃ、長生きしない」という紋切り型に集約される、知的早熟の例を取り上げる。

14歳で修辭学の教授になった早熟なヘルモゲネスは、24歳の段階では凡庸どころか、まったくもって無学となってしまった。ソフィストのアンティオコスがこう言ったのは彼のことである。稚クシテ老イ、老イテ稚シ<sup>51</sup>。

注目すべきは、ここに見られるような医学的言説が、老いを反省的思考が増大させるある種の情念＝生気の相対的過剰として説明していることだ。情念のエネルギーの自然な増減が心身にさまざまな変調を引き起こすだけでなく、エネルギーの過剰が生命を疲弊させ、老いをもたらすのである<sup>52</sup>。生気の定義ないし実体をめぐるこの時代の医師たちの見解の相違<sup>53</sup>には本論では立ち入らないが、血液循環の閉塞による生命の減衰という老いの機械論的説明はもはや立ち行かず、老いはしばしば精神の、そして生命循環の加速ですらありうるのである<sup>54</sup>。再びカバニスを参照するならば、彼は「年齢論」において、老いを生命の「加速」によって表現している。

老いに差し掛かったとき、人は自らの衰弱を明瞭すぎるほどに察する。しかしこの結果はそれが明らかになる時期に初めてあらわれたわけではない。生命はその最高潮に達してからすでにずいぶん長いこと、疾走し、つねに加速しながら

---

<sup>51</sup> Polinière, art. cit., p. 51.

<sup>52</sup> ただし、ここでいうエネルギー、あるいは医師たちが「生命」の力と呼ぶものが具体的にどのような実体をもつのか、そもそも何が「過剰」であるのか、体液の過剰と情念の過剰がいかんにして連関しうるのかに関する統一見解は見いだせず、それ自体が19世紀前半の医学者たちの議論の対象である。例えば高名な生理学者アドロンによる以下の記事は、こうした一連のあいまいさに対する苛立ちを表明している。Nicolas-Philibert Adelon, « Humeur » in *Dictionnaire des sciences médicales*, Panckoucke, t. 22, 1818, p. 73 et sq.

<sup>53</sup> シャトーブリアンの同時代における生気論の展開については、以下の医学史的研究を参照。Roselyne Rey, *Naissance et développement du vitalisme en France de la deuxième moitié du 18<sup>e</sup> siècle à la fin du Premier Empire*, Oxford, Voltaire Foundation, 2000.

<sup>54</sup> 少なくとも、生気論者の牙城モンペリエ学派に属するエチネヌ・トゥルテルのような同時代の医師にとって、「血の循環のあらゆる障害を破壊することで、老人を若返らせ老いを遅らせることができる」という老いをめぐる機械論的説明が時代遅れとなりつつあったことを確認しておこう。Cf. Etienne Tourtelle, *Histoire philosophique de la médecine, depuis son origine jusqu'au commencement du XVIII<sup>e</sup> siècle*, Levrault, 1804, p. 434.

ら、あらゆる束の間の実存が飲み込まれていくところの淵へと殺到している  
のである<sup>55</sup>。

この章の全体を通じてカバニスが「衰え」としての老いという常識的な見方を放棄していたようには見えない。それにもかかわらず、彼は他の記述との整合性や加速の理論的背景を必ずしも気に留めることなく、こうした生命の「疾走」と「加速」、つまり生命の過剰としての老いを描く。老いはもはや、前世紀において百科全書の記事「老い」のエピグラフに選ばれたヴォルテールの詩が「魂が身体よりも先に死ぬ」とうたったような、情熱や欲望の悲しくも穏やかな減退の時であるとは限らない<sup>56</sup>。それどころか、ルソーに端を発する「完成可能性」の概念を称揚し、精神現象の生理学的解明を通じた人類の進歩への貢献を志すカバニスはむしろ、世界の前進に対して個人の死という否定性を宥和させようとする。カバニスは、ヴォルテールとは対照的な明るさをもって、ラ・フォンテーヌの「それは好日の晩だ」という詩句を引用し、老いが最良の時となりうることを強調する<sup>57</sup>。「あらゆる束の間の実存が飲み込まれていくところの淵」、つまり死のうちには、カバニスにとって「まったく恐るべきものはない<sup>58</sup>」。

自然においてすべては絶えざる運動の中にある。あらゆる物体は常に不安定である。これら物体の諸要素は組み合わさり、解体される。次々に無数の過渡的な形態をとる。そしてこうした変容は決して中断されることのない作用の結果であり、こんどは自らその作用の新たな原因となって、宇宙の永遠の若さを保つのである。

少し考えれば、あらゆる運動が破壊と再生産を引き起こす、あるいは必要とすること、自己破壊し再生する物質＝肉体の諸状態は刻一刻と変わるはずであること […] は容易に感じ取ることができる<sup>59</sup>。

---

<sup>55</sup> Georges Cabanis, *op. cit.*, p. 297-298.

<sup>56</sup> Voir Louis de Jaucourt, « Vieillesse (*Physiologie*) » dans *Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, éditions. Denis Diderot et Jean le Rond d'Alembert, University of Chicago: ARTFL Encyclopédie Project, Robert Morrissey and Glenn Roe (eds), 2017[1765], <http://encyclopedia.uchicago.edu/>. Consulté le 10 mars 2018.

<sup>57</sup> カバニスの社会思想については、例えば以下の包括的研究がある。Mariana Saad, *Comprendre l'homme pour changer le monde*, Classiques Garnier, 2016.

<sup>58</sup> Cabanis, *op. cit.*, p. 308.

<sup>59</sup> *Ibid.*, p. 237.強調は秋元。

原因と結果の「ヒポクラテスの循環」のなかで起こる過剰＝自己破壊は、彼によれば事物の新しい結びつき、つまり「永遠の若さ」を準備する自然の成り行きなのである。19世紀初頭を代表する医学者が「人間の心身に年齢が与える影響」と銘打った章をこのようなエピクロス的原子主義宣言によって始めるとすれば、それは老いと死という個人にとっての端的な否定性を、宇宙の生氣論的「若さ」というより大きなヴィジョンの中に包摂し、「生みの苦しみ」として肯定するためにほかならない。

## 5. 若年の恍惚、老年の不安

こうした医師たちの楽観にもかかわらず、老いてなお止まぬ精神、情念、生気の無際限の拡大は不幸な「永遠の若年」を文明人に強いる。シャトブリアンの描く老人たちは、その説教者としての役割にも拘らず、若き日のメランコリーにどこか固執している。『アタラ』においてオブリ神父が、「私もね、我が娘よ、心の動揺を知っているのですよ。この髪ははじめから禿げていたわけでも、あなたに今日そう見えているように、この胸はずっと平静だったというわけでもないのですよ」と死にゆくアタラが現世の愛へ執着していることを叱責するとき、彼は自身の過去を引き合いに出すことによって若者たちの注意を引く<sup>60</sup>。現世の愛の儚さを説き、生者に死の準備を呼びかける点でボシュエの棺前説教にも比せられるオブリの説教は、しかしその模倣によってむしろ差異を際立たせる。自らの声もまた過ぎ去っていく時間の中で消えていくという不確実性を自認するボシュエの説教とは異なり、オブリの説教は「わたしの経験を信じなさい」という断言と、「自らが若者であったこと」の執拗な強調を伴う。為す術もなく恋人の死を看取ったのち、こうしたオブリのペシミズムに苛立って「この森にいったい何をしに来た、神父！」と怒鳴るシャクタスに応えて、オブリは来るべき死への準備を勧めるボシュエ的な語調から突如として脱し、やはりある種の経験論に依拠しはじめる。

---

<sup>60</sup> Chateaubriand, *Atala, Œuvres romanesques et voyages, op. cit.*, p. 82.

えい、不幸な男め、私に激情ばかり見せつけおって、天に唾するときはものだ。このオブリ神父のように、おぬしも三十年山の中を彷徨えば、天命の意図の善し悪しをそも拙速に決めつけることもないだろうよ<sup>61</sup>。

しかし、この説教における三十年の「経験」の意義、そして「天命の意図」の内実はあいまいなままである。この期間は、直接的には彼が隠者として野生人たちの間で献身した期間のことを指しているようにも思われるが、オブリは三十年の宣教がもたらした救いのことを語るどころか、彼は現世よりもなお死のほうに救いであるとアタラに説く。老人が繰り返し強調する「経験」とは結局のところメランコリーの克服の経験どころか、メランコリーを胸裏でくすぶらせつづける経験、彼の言う「疲弊」の経験なのである。オブリがこの激昂ののち、我に返ったように「息子よ、わたし自身のために言っているのではない」と付け加えるとき、このキリスト者の率直な謙遜は同時に、再び燃えさかろうとする情念から身を遠ざける試みのようでもある。

ナチェズ族においては、実年齢の違いは世代の分断をもたらさなかった。彼らは、アメリカの森の「古い鳥たち」におけるように「古い歌と若い後続世代の新しい歌が混ざり合う」調和的な社会を形成する<sup>62</sup>。しかし、シャトーブリアンの描く未開社会において老人が経験ある若者であったように、文明においては、老人は疲弊した若者である。「私も心の動揺を知っている」という共感の分だけ、老人は若者の傲慢な情念礼賛に感染し、同時にひそかな反感を自らのうちに育む。峻厳な父性、あるいはベルシェの言葉を借りれば「超自我」の名のもとになされたとされるスエル神父の一見すると非の打ち所なく教育的な叱責にも、それに相応しからぬ動揺の跡を作家が書き込んだことが確認できる。

わたしに見えるのはね、何もかもが気に入らなくて、無意味な絵空事に耽るために社会の責務を逃れた、妄想にとりつかれたひとりの若者ですよ。あなたね、世の中の厭わしい側面を知っているからといって偉いわけじゃあ全くないんです。 […] 自己満足する傲慢な若者よ、神とともにいるのでなければ孤独は害ですよ<sup>63</sup>。

スエル神父がルネを「傲慢な若者よ *jeune présomptueux*」と叱責するとき、この表現は、エミール・リトレ仏語辞典の« *présomptueux* »の項に用例として

---

<sup>61</sup> *Ibid.*, p. 76.

<sup>62</sup> *Ibid.*, p. 40.

<sup>63</sup> *Ibid.*, p. 144-145.

引かれているとおり、コルネイユの『ル・シッド』を想起させる。ここで興味深いのは、引用されたこの二語の表現そのものよりも、『ル・シッド』の引用箇所を思い起こさせることによって、シャトーブリアンがあたかも老人と若者の間の隠れた対立関係を示唆しているということだ<sup>64</sup>。『ル・シッド』は、『アタラ』『ルネ』のように、若者と老人の対話の入れ子構造から成っている。ドン・ディエーグはまさに「老いている」ことをゴメス伯爵に侮辱され、このゴメス伯爵もまた、「傲慢なる若者」ドン・ロドリグに挑発される。引用箇所の後続部分において、若きドン・ロドリグはこの言葉尻を捉え、世代間闘争としての側面を強調しつつ老人を挑発するため、「うろたえずに話せよ。たしかにわたしは若い、だが高貴なる魂の武勇は、年数などでは測れぬわ<sup>65</sup>」と言い放つのだ。こうして、一方では自身が老人を超えるとおもひこむ若者、他方には、若さを引きずり、若者の傲慢なる挑発を前に「動揺」を抑えきれない老人が見出される。シャトーブリアンが、スエルは「ひそかに同情の心を<sup>66</sup>」隠している、と一行だけとはいえ付け加えたことは確かであるが、この同情の心はその分だけ嫉妬と反感を老人にもたらすのだ。

過剰の世紀を生きるルネは、しかしこの過剰の「活用」を促す同時代的言説を拒絶することを最後に確認しておこう。結論に位置するスエルの説教は、ピエール・グロードによれば、ナルシスティックな自閉から社会貢献を通じた成熟への転換を促す点において、第一帝政においてむすばれた政教和約のもとで、キリスト者が多かれ少なかれ社会的コミットメントを求められたという事態を反映しているが、「恐ろしい罰」を引き合いに出したスエルによるこの具体性を欠く勧告、「情念の放流」の薦めは、しかし物語進行上においては効果を発揮していない<sup>67</sup>。この「超自我」の命令にもかかわらず、物語は「ルネは二人の老人に急かされ、妻のもとへ戻ったが、幸福をみつけることはなかった<sup>68</sup>」という文で締めくくられるからだ。そしてこれこそが、後続世代の若い読者たちが望んでこの物語の教訓を無視し、呪われた美しい

---

<sup>64</sup> シャトーブリアンにおける 17 世紀の文学的記憶の援用を論じたものとしては、以下を参照。Émanuelle Tabet, *Chateaubriand et le XVIII<sup>e</sup> siècle : Mémoire et création littéraire*, Honoré Champion, Paris, 2002.

<sup>65</sup> Pierre Corneille, *Théâtre II*, présentation par Jacques Maurens, Flammarion, 2006 [1980], p. 231.

<sup>66</sup> Chateaubriand, *René, Œuvres romanesques et voyages, op. cit.*, p. 144.

<sup>67</sup> Pierre Glaudes, art. cit., p. 179.

<sup>68</sup> Chateaubriand, *René, Œuvres romanesques et voyages, op. cit.*, p. 146.

若者ルネに陶醉とともに自己投影した理由でもあろう<sup>69</sup>。ルネの隣でこのスエルの説教を聴いていたもうひとりのインディアンの老人シャクタス——ただしフランス帰りの半文明人である——はといえば、この助言を含みのある態度で受け止める。

盲目の長老シャクタスは微笑みはじめたが、目と釣り合いのとれないこの口の微笑みには、なにか神秘的でこの世ならぬものがあつた。「息子よ」と老いたるアタラの恋人は言う、「スエルはわしらに手厳しいことを言う。老人も若者も矯正するというわけじゃ。じゃが彼は正しい。そうじゃとも、お主はその途方もない辛苦ばかりの生き方を諦めなければならん。常道にしか幸せはないものじゃよ<sup>70</sup>」

地の文が強調するように「アタラの老いたる恋人」は、自身の過去を思い返しながらか同意するが、メランコリーの残滓としての微笑み、この世ならぬ確信をひとり隠し持った微笑みをたたえている。「口の微笑み」と動かない目の奇妙な不整合は、彼とスエル神父のあいだの隔たりを証言する。彼の目は、あたかもアタラを失ったときに機能を失い、それ以降老いていないかのように、口の微笑みにも、スエルの説教にも応答しない。さらに、このポリフォニーは「三人の友人たちは彼らの小屋へと帰路についた。ルネは神に祈る宣教師と、道を探す盲目の長老とのあいだで黙って歩いた<sup>71</sup>」という語りの次元でも著者によってひそやかに追認されている。盲目のシャクタスが道を模索する一方でスエルは祈りをささげるのみであり、ルネはそのあいだで「黙って」いる。過剰な力が若者のみならず老人をも悩ませる近代文明にあつては、スエルの説く力の放流という正論が「老人も若者も矯正」する——つまり同列に扱うというシャクタスの、ともすれば皮肉めいた指摘は正鵠を射たものである。

老人と若者をひとしく激動の不安に晒すこの動的な時間は、例えば『キリスト教精髄』の第二部第五卷第五章「世界の古さと新しさ」において作家が夢見た老いと若さの始原的分割とは対照的である<sup>72</sup>。シャトーブリアンはこ

---

<sup>69</sup> 後続世代へのルネの影響については、Pierre Glaudes, *art. cit.*, p. 165-166.を、『ナチェズ』内でのスエルの説教の位置づけについては p. 177 を参照。

<sup>70</sup> Chateaubriand, *René, Œuvres romanesques et voyages, op. cit.*, p. 145.

<sup>71</sup> *Loc. cit.*

<sup>72</sup> ビエール・グロードは前掲論文において、『ルネ』の語りは『キリスト教精髄』の教説に対して、反面教師とすべき「例証譚 *récit exemplaire*」の役割を持つと論じている。

の章で考古学的観点から大洪水を駁せんとする科学者たちに答えて、世界は突如神によって作られ、同時に過去と現在を植え付けられたものであると主張した。すなわち神は「まず古い森と若い低林を植え」、「鳥の古巣と新たな後世の鳩たち」を共存させることによって、年経たものだけがもつ美しさと、その美しさへの畏敬がもたらす道徳を世界に保証する。世界で最初の波が岸辺を浸す前に、逆説的にも波に削られた岩礁がすでに存在していたとまで作家は夢想する<sup>73</sup>。つねにすでに老いているもの——作家はこれを「原初の古い *vieillesse originaire*」と呼ぶ——は、絶えざる過剰と生成変化とは無縁の、老人は老人として、若者は若者として生まれる静的な時間への作家の憧憬の産物である。ところがルネの独白は、そもそもこのような「原初の古い」の探求の失敗に端を発する。彼はまずギリシャとローマの遺跡を問い訪ね、うしなわれた詩情をもとめていまやその伝統が途絶えた吟遊詩人の素朴な歌を聴く。しかし、こうした年古りたるものの模索の末に彼が出した結論はこのようなものである。

しかしここまでこんなに疲労して、ぼくが一体何を学んだというのでしょうか？ 古いものには何も確かなものはなく、新しいものには美しいものがなにもない。過去と現在は二つの未完成の彫刻なのです。過去は年月の残骸からひどく破損したまま取り出され、未来は来るべき完成に未だ浴していないのです<sup>74</sup>。

ルネはこうして、過去に対しても未来に対してもひとつの「過剰」となり、まだ存在しないものを待望している。同時代精神ならば、たとえばスエルはナルシズムを捨てて社会に貢献することを訴え、医師たちはこの対象なき欲求がもたらす苦痛のうちに人類と社会の成長原理を見る。ところがルネは、共有された正論に抵抗する。シャトーブリアンはすでに、友人フォンターヌに宛てた、『キリスト教精髓』の執筆意図を説明する手紙の中で、「完成可能性」概念のとりわけ著名な推進者であったスタール夫人が『文学論』（1801）の序文に「子どもたちはつねに父らより偉大だ/それでいて父らの心は嫉妬を知らない<sup>75</sup>」という詩句を掲げたことをアイロニカルにあげつらっている。

<sup>73</sup> Chateaubriand, *Essai sur les révolutions, Génie du christianisme, op. cit.*, p. 555-556.

<sup>74</sup> Chateaubriand, *René, Œuvres romanesques et voyages, op. cit.*, p. 124

<sup>75</sup> Madame de Staël, *Œuvres complètes série I, De la littérature et autres essais littéraires*, sous la direction de Stéphanie Genand, t. II, Honoré Champion, 2009, p. 112. 詩句の典拠については同書の p. 377, note.11 を参照。

ああ！ わたしたちが年を経るごとにより良くなっていくとか、息子たちはつねに父よりすぐれているなんてことがあれば、それはたいそううるわしいことではないですか<sup>76</sup>。

「完成可能性」のオプティミズムに対するこうした批判は、実のところそれが老いの意味を拭い去ってしまうという懸念に由来する。ルネが「時が一步踏み出すと、地の表面が刷新されるのです」と詩篇を引用しながら嘆くように、もし人類が道徳的基盤を絶えず刷新するのならば、老人にとって「年を経る」ことは自らの道標をたえず見失うことになりかねない<sup>77</sup>。シャトブリアンからみれば、スタール夫人の引用した詩句は、時代の進歩と人間の年齢を都合よく混同していることになるだろう。そもそも過剰性が成長をもたらし、その循環が無限の進歩につながるという言説は、個人の老衰、あるいは若き日のメランコリーといった苦痛は一過性のものであって、共時的次元（「同胞のためにそれを使わなくてははいけません」）あるいは通時的次元（「息子は父よりすぐれている」）において贖われるという慰めを含意している。ところが、ルネが退けるのはまさしくこうした個の苦痛の発展的解消である。この傲慢な若者は、自らのメランコリーにあえて個人として「自足」する。ルネが姉との別離から汲み出した逆説的な悦楽は、まさしくこの苦痛を独占することの肯定からくるものである。

ぼくは悲しみの絶頂で、ある種の予想外の満足感すら覚えたのです。そうして湧き上がってくるひそかな喜びとともに、苦痛は快楽のように尽きてしまう感情ではないと気づいたのです<sup>78</sup>。

ルネにおいて、情念は姉との別離という否定的事実を対象にとる。起こってしまった不幸を対象として燃え盛る情念に終わりはない。オブリ神父は「苦痛というのはまったく永遠ではない。いつか必ず終わるはずなのだ、なぜなら人のこころは有限なのだから<sup>79</sup>」と説き、神においてのみ永遠を信じ、無限の情念の存在をそもそも認めようとしなかったことを想起されたい。ルネは、まずこうした有限性を拒否しつつ、他方で医師たちの説く苦痛の一過性

---

<sup>76</sup> Chateaubriand, *Essai sur les révolutions, Génie du christianisme, op. cit.*, p. 1265.

<sup>77</sup> *Ibid.*, p. 123. 出典は p. 1203 を参照。

<sup>78</sup> *Ibid.*, p. 140-141.

<sup>79</sup> Chateaubriand, *Atala, Œuvres romanesques et voyages, op. cit.*, p. 82-83.



と、「放流」によるエネルギーの転用がもたらす公益性を拒否することで、たった一人その無限性に恍惚のうちに浸ることを選ぶのである<sup>80</sup>。

本稿の辿ってきた理路を振り返っておこう。シャトーブリアンにおいては若さの証としてのメランコリーが文明人をひとしく不安に晒す時間の力として再定義され、インディアン社会は対照的にひとつの理想を作家に提供した。作家は同時代の医学的言説と同じく、こうした文明の病の背景に生命の力としての情念の膨張を見出すが、この過剰がもたらす苦痛はシャトーブリアンにおいては進歩主義と結びつかない。ルネによって、不在を対象とする無尽蔵の喜びとして享受されるのである。

最後に付け加えておこなうならば、青年ルネにおいては、逸る情念が内的時間を加速させ、それゆえメランコリーは実年齢に対する過剰な老いとしてあらわれた。他方で、老人は未だ消え去らない情念によって、自らの歴然たる肉体的衰退に対する意識の過剰な若さに苦しむ。若く傲慢なルネはまだ、こうした同時代的時間のうちで老いることの困難を気に留めてはいない。しかし、隠遁の必要を痛感した宣教師たちのうちに燻り続ける若年期の情念や後続世代への反感、情念を抱き続けることへの疲弊はルネの早老の裏返しであり、ここに予示された「過剰な若さ」としての「文明人の老い」の困難は不幸にもシャトーブリアンの後半生につきまとい、ついには草稿として残された『老年と愛』そして『ランセの生涯』の主題を成すこととなる<sup>81</sup>——七月王政に幻滅し、政界を半ば追放されるようにして退き、困窮と持病に喘ぎつつもレカミエ夫人のサロンに通っては後続世代への嫉妬をあらわにする老作家の晩年の苦悩は、本稿が検討したルネの絢爛たるメランコリーと、その意味で不可分のものなのである。

---

<sup>80</sup> *Ibid.*, p. 140-141.

<sup>81</sup> この点については、以下を参照。秋元陽平「シャトーブリアン『ランセの生涯』における晩年」『フランス語フランス文学研究』109号、日本フランス語フランス文学会、2015年、55-69頁。